



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダンス・文化・ランドスケープ：アートとサイエンスのオープンカフェ
Author(s)	片桐, 保昭
Citation	日本造園学会北海道支部大会研究・事例報告発表要旨/会報, 15, 17-18
Issue Date	2011
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47339
Type	journal article
File Information	landscape_katagiri.pdf



ダンス・文化・ランドスケープ：アートとサイエンスのオープンカフェ

北海道大学大学院文学研究科 片桐保昭〇

はじめに

これは発表者が所属する市民団体「寄り辻を作る会」^(注1)が企画し、本年6/12（日）に市立小樽文学館野外多目的広場において行われた「ダンス・文化・ランドスケープ：アートとサイエンスのオープンカフェ」の報告である。このイベントは従来の造園学とは異なる視点からの風景表現の拡張を探るものである。広場と建築に加え、音とダンスを取り入れている点でもユニークである。

1. 背景：文化人類学からのランドスケープ表現

文化人類学においては、風景は作品や施設といった形式として社会に受け入れられる面と同時に、作品だの施設だのといった枠組みでは説明しきれないが、その分、個的には多様な感慨を生じさせる側面があるとされる。後者には社会性の反映としては説明しにくい分、風景に新しいものが現れる可能性がある(Hirsh 1995)。

風景に何らかの社会的な意味や生態的理工的な機能を探求する近代造園学の立場(e.g. 江山 1977)では、一般性が求められ、この多様さは主観的なものとして棄却される。かといって、その棄却された側面を「アート」のように説明不可能なものとして捉えると、これも「芸術作品」といった社会的な制度^(注2)に収斂させられてしまう(Clifford 2003)。

社会に受け入れられる以前の風景に注目すると、作品や施設としては説明できない風景の一面が現れる。それは風景の中に説明がつかない、排除や賞賛の対象とされぬ異質なものを配置することによって表現されよう(片桐 2011)。そこには従来の科学技術とは全く別の視点からの風景が開けている。

2. なぜダンスなのか

なぜここでは植物や建築土木ではなくダンスを使うのであろうか。風景や建築を背景にしたダンサーたちの試みは様々になされているが^(注3)、ダンスと造園の類縁性をまとめると、ダンスをしている人体は、常に規則性を持って揺らいでいる(Gell 2006)。同じく風景における植物や水は一定の秩序を持って静止しているようで、その形態は、風などによって常に揺らいでいる。この点で風景を構成する要素としては等価といえよう。このゆらぎが風景において「異質なもの」を発生させるのである^(注4)

⁴。しかも魅力的なことにダンサーと音楽家の出演料は、造園工事と比べ格段に安価なのである。

3. プログラムと演者について

(1)プログラム: イベントの思想がいささか難解なので、この点を企画事業者が解説し、その次にダンスを行い、さらに入り込み客からの感想や意見を聞くというサイエンスカフェの構成をとった。通常のサイエンスカフェでは、90分を休憩をはさんで前後に分けて、前半に解説、後半にディスカッションを行うのが効果的とされる(中村 2008)のでこれに倣った。

(2)演者: ダンスや音楽のみが「作品」として突出してしまうと、それは周囲から目立ってしまい、周囲を含んだ風景として成立しなくなってしまう。また具体的なコレオグラフィー(振付け)や音具、音階表現については主催者の専門外なので、演者については「芸術」性や「作品」性を問い直す表現活動を行っている方に即興でお願いした。

表：ダンスと音楽担当演者のプロフィール

ダンス：中村達哉	音楽：四方暢男（四方暢夫）
1975年埼玉県生。ダンスカンパニー「イデビアン・クルー」所属「ヨコラボ10'」集団創作コースオブザーバー(2010)「BankART1929」スタジオアーティスト(2011)	1962年札幌市生。1991年より作曲家として活躍。茨城県アクアワールド大洗のサウンドスケープデザイン(2000)。エジンバラ fringe05 フェスティバル(2005)参加。



写真1：出演中の中村達哉氏(左)と四方暢男氏(右)

4. 会場と会期について

(1)会場: 平成22年に完成した小樽市立文学館・美術館多目的広場（小樽市色内1-9-5）を会場とした。この広場は発表者が設置を提唱し(片桐 2007)、その設計に長期間にわたって関わってきたものである。

会期について: 入込み客数の増加を期待して日照時間が長く、また晴天日も多いと思われる時期を選定した。

(2)キャパシティ設定と会場設営: 来場者数は多くて50人と経験的に予測してイス等を用意した。コーヒーパーを設けコーヒーとウーロン茶を無料で提供した。飲料の準備とサービスは市立小樽文学館、小樽文学舎の皆さんに無料ボランティアを得て実現した。

5. 来場者とその反応

(1)来場者数: 開催中最大40人を数えた。



写真2. 開催中の広場の風景

(2)顕著な反応: 顕著なものとしては、演者の動きに合わせて一緒に踊る2名がみられ、前半終演とともにクラシックバレエでみられる「ブラボー」という叫び声を幾度も発し、ディスカッションにも積極的に発言した。後で両名に話を伺うと、世界的にも高名なバレリーナであった。この二名においては、会場の広場は自分たちにとっては身近なバレエという「アート」に「遷移」したと解釈できよう。

他の入り込み客については、アンケートに加え、後日にインタビューを行った。

(3)アンケート: 入り込み客全員に用紙配布による簡単なアンケートを行った。アンケート用紙7枚が回収され、うち肯定的な評価が2件、肯定とも否定とも判断できないものが1件、無記入が4件であった。

(4)インタビュー: 若干名に対して行うことができた。以下にその概要を列挙する。

「またやってほしい」

「役所やコンサルの考えることとはひと味ちがう」

「家内が変なダンスのマネをするようになった」

「今まで不思議に思っていたことが理解できた」

「地域づくり政策の流れとは無関係に突出している」

「話は面白いがダンスは面白くない」

6. 総括と課題

主催者の経験からいうと、小樽市内でのこの種のイベントとしては良好な入込み数であり、好意的な感想も多いことから、造園と文化を扱ったサイエンスカフェとし

ては十分に意義深い成功を取めたと確信している。しかし作品や施設などとしては説明できない個々の感慨がどう現れたかは、今回のアンケートやインタビューでは把握しきれなかった。

(1)拡張する風景表現の課題: 人体を風景の一要素とした点、入込み客から良好な反応を得た点では拡張されたといえよう。しかし社会性が反映される以前の風景のあり方、つまり表現の可能性がどう拡張されるのかは、さらに多くの事例の蓄積が必要であろう。

(2)結果と調査法の課題: このような試みの性格上、構造化した調査（アンケートや一問一答のインタビュー）では、個々の感慨を明らかにすることは困難であり、半構造化インタビュー等の質的手法による調査が求められる。そのためにはディスカッションなどにおける調査者と入込み客のコミュニケーションを濃密にとれるよう、プログラムを工夫することが求められる。

謝辞

本イベントを行うにあたっては日本造園学会北海道支部会からの助成をいただき、以下のみなさまから多大な協力をいただいた。寄り辻を作る会の鈴木良徳氏（ほしみのカーリー屋さん）、早川陽子氏（早川陽子設計室）、前田隆護氏（アート工房 開拓舎）、酒井祐司氏（イメージランドスケープ）、市立小樽文学館の玉川薫副館長、小樽文学舎のボランティアのみなさま。記して感謝の意を表する。ありがとうございました。

注1: 「寄り辻」とは文化多元主義の見地から提唱された、近代パークシステムとは異なる秩序を持つオープンスペースのことである(片桐 2007)

注2: 芸術、アートなどと呼ばれる分野も18～19世紀に制度化されたという点で社会の反映であることに留意されたい

注3: Meredith Monk(1942-)による“Vessel”(1971)、

Laura Dean(1945-)による“Changing”(1974)、Rosasによる“Rosas Danst Rosas”(1983)など多くが挙げられる

注4: このゆらぎが大きくなると目立つので、単体で作品や危険物として鑑賞や排除の対象とされ、風景としては成立しなくなる(片桐 2011)

参考文献

- 江山正美(1977): スケープテクチャ: 鹿島出版会, 436pp.
 片桐保昭(2007): 都市の風景、あるいは明日のためのオープンスペース: 市立小樽文学館報(30)1, 12-4.
 片桐保昭(2011): 名付けぬ風景をめざして-デザイン実践の現場から-: 博士論文, 北海道大学大学院文学研究科.
 Clifford, James・太田好信ほか訳(2003): 文化の窮状: 人文書院, 601pp.
 中村征樹(2008): サイエンスカフェ-現状と課題-: 科学技術社会論研究(5)31-43.
 Gell, Alfred(2006): Style and Meaning in Umeda Dance: *The Art of Anthropology*. 136-58: Berg, 260pp.
 Hirsh, Eric eds. (1995): Introduction: *The Anthropology of Landscape*. 1-30: Oxford University Press, 268pp.